

日本アメリカ史学会第 48 回例会報告

2020 年 10 月 17 日（土）、「デジタル・ヒストリーとデジタル・コレクションの地平線」と題し日本アメリカ史学会第 48 回例会を開催した。本例会は、研究テーマに合わせてデジタル・コレクションを駆使すべく試行錯誤しているのが、平均的な本学会会員の姿と仮定し、デジタルのスキルをどれほど取り込めるのかについて検討するべく企画された。例会ではまず、カリフォルニアと日本を繋ぎ、デジタル・コレクションとアーカイブの深化を進める図書館の専門知実践の立場から、上田薫氏にお話を伺った。続いてアメリカ史からは山中美潮氏、イギリス史から小風尚樹氏に登壇いただき、デジタル・ヒストリーの特徴と課題を紹介していただいたうえで、マッピング、テキスト分析、ネットワーク分析をはじめとする最前線の方法論とそれぞれの研究事例について紹介していただいた。質疑応答では関心や手法、定義に関して等、さまざまな広がりのある質問に加えて、今後にもつながる活発な議論が行われた。以下が日時等の詳細および登壇者から頂いた報告要旨である。

タイトル： 「デジタル・ヒストリーとデジタル・コレクションの地平線」

日時： 2020 年 10 月 17 日(土) 12 時～15 時 40 分

会議プラットフォーム： zoom

参加者数： 46 名

司会・菅（七戸）美弥、笠井俊和

上田薫 スタンフォード大学フーヴァー研究所（ジャパニーズディアスポラコレクション）

「デジタル・コレクションの舞台裏と今後の展望：米国での資料収集、デジタル化のケース・スタディー」

コロナ禍で世界中のアーカイブス、図書館が一時閉館、或いは入館制限に追い込まれ、自宅でも見られるウェブベースのデジタル・コレクションの利用はますます増えている。これらのデジタル資料の収集、作成する立場から、資金、社会、日系コミュニティ、学会動向、著作権、所有者の立場、デジタル化の難易度、言語の問題など影響要因を考察する。舞台裏を紹介することでユーザである研究者がデータ・バイアスに関する理解を深められることを狙う。また、オンライン化するためのノウハウは小規模のコミュニティアーカイブスでは対応が難しく、大手の図書館などとのコラボの必要性が高まっている。日系人が集中するカリフォルニア州からのケース・スタディーを紹介する。

小風尚樹 千葉大学（近代イギリス海事史、デジタル・ヒューマニティーズ、特に財務記録史料のデータモデル構築）

「Digital Computational History の実践：大量のテキストデータを扱う可能性と課題」

本発表では、広義のデジタルアーカイブの普及によって入手可能となった大量のテキストデータを扱うデジタル・ヒストリーの可能性と課題を論じる。発表における二つの柱は、「テキストマイニング」と「構造化テキスト」である。

テキストマイニングは、テキストコーパスを詳しく読むことなく、そのコーパスの特徴をつかもうとする手法である。頻出語や共起語情報を統計的に分析し、その結果を視覚化データとして表現することで情報を圧縮し、何らかの尺度で注目に値する点を浮き彫りにすることを目指す。これにより、1970 年代に見られた数量的歴史研究の実践者らによって批判されたこと（※「明確には定義されていない母集団から非明示的に選択された事例を用いて」歴史を再構築しているという印象を形成すること）に陥ることを避けるために、史料選択の理由を数量的に説明して質的叙述を補強することができる。

テキストマイニングよりも細やかなテキスト読解をデジタル環境上で実践するための基盤技術として、構造化テキストがある。欧米ではすでに Text Encoding Initiative が人文諸学の知見をデジタル学術編集版

に反映するためのマークアップ言語の基盤を整備して久しい。本発表では、発表者の専門であるイギリス海事史における会計史料の構造化とデータ分析を事例に、構造化テキストの概要と利点について紹介する。

テキストデータを扱う、このようなデジタル・ヒストリーの実践における課題として、教育の問題が挙げられる。デジタル技術の習熟と歴史的専門性の深化を両立させることは困難を伴う課題であり、国際的にもまだ議論が熟していない。本発表では、発表者が代表を務める Tokyo Digital History の取り組みの一端に触れつつ、今後のデジタル・ヒストリー教育の中長期的な展望について議論したい。

山中美潮 同志社大学（アメリカ南部史、黒人教育史、パブリック・ヒストリー、マッピング）

「アメリカ史とデジタル・マッピング：人種隔離制度研究の事例から」

デジタル・ヒストリーは近年、歴史学の一分野・手法として急成長を遂げてきた。本報告ではこれまでアメリカ史研究にいかに関わりが取り入れられてきたのか、特にマッピングの技法に注目しその特徴を整理、具体例として人種隔離研究への影響を検討する。またデジタル・マッピングに挑戦するにはどんな準備・計画が必要か、デジタル・ヒストリーへの取り組み・評価に対する将来的な課題について、参加者と共に論じる機会としたい。